

タウト塾@熱海

2022

ゆぜんじんじゃ

令和4年度

熱海温泉と 湯前神社 06



- 熱海の温泉
- 熱海温泉図彙
- 少彦名命
- 大湯間欠泉
- 化現の逢凶
- 湯前神社
- 噺汽館
- 今井半太夫

熱海の温泉 「大湯」と「走り湯」

熱海は「温泉のまち」として始まり、発展を遂げてきました。そしてこれからも温泉のまちとしての発展めざしております。熱海市の温泉は、熱海村の「大湯」と伊豆山村の「走り湯」が存在していました。

「大湯」は 湯前神社を社とし大湯権現を祀り、奈良から江戸、明治、大正とその中心として発展をとげてきました。

「走り湯」は 伊豆山神社を社に伊豆山権現とし日金山の中心として独自の発展を遂げてきました。



明治時代の大湯



現代の走り湯

湯前神社と伊豆山神社

「大湯」は少彦名命を祀り「湯前神社」として存在しています。

そして

「走り湯」は走湯権現として「伊豆山神社」となっています。



湯前神社

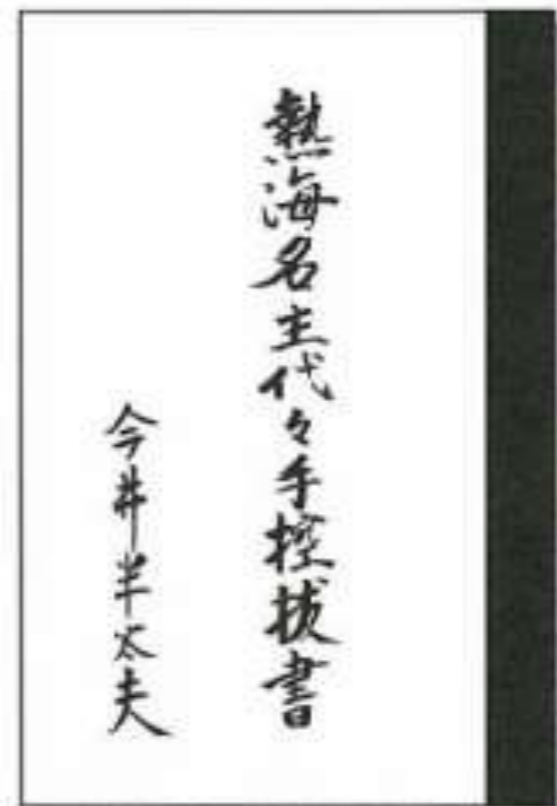


伊豆山神社

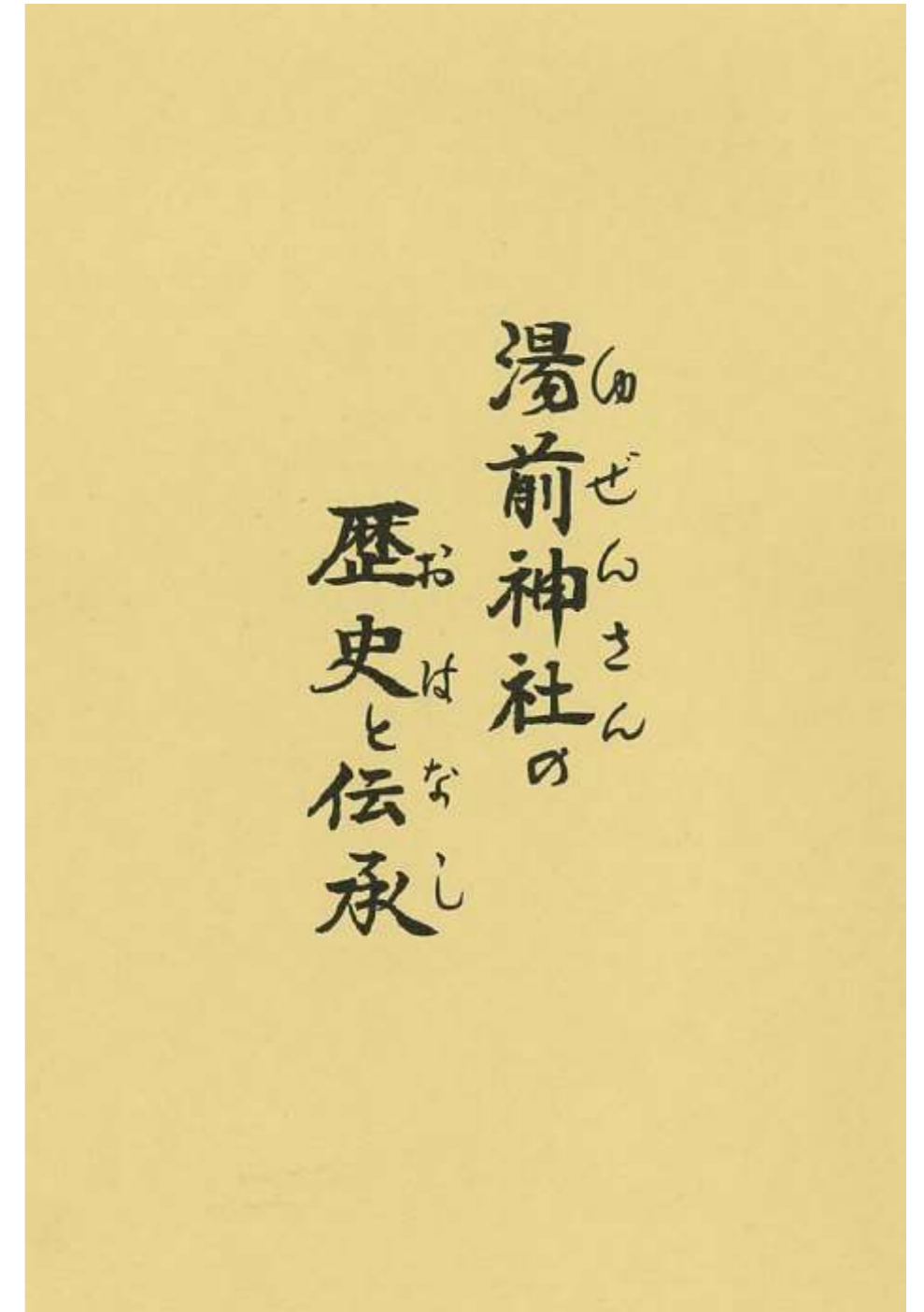
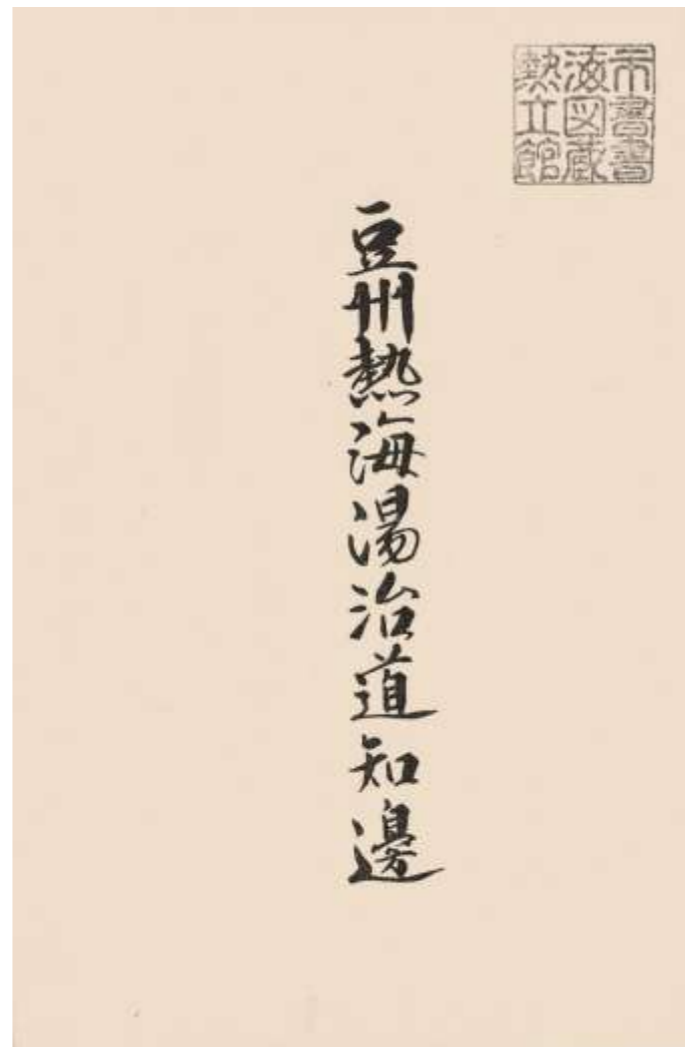
湯前神社の歴史と伝承

「湯前神社」はいつ頃からどのようにしてまつられるようになったのかについて「伊豆国神階帳」、菱川師宣による「豆州熱海湯治道知邊」、山東庵京山による「熱海温泉図彙」、今井半太夫の「熱海名主代々手控抜書」、「豆州加茂郡熱海郷湯前権現拝殿再興勧進の状」（1667）など、いくつかの文献に記されています。これらには同様な伝承内容が重複しています。

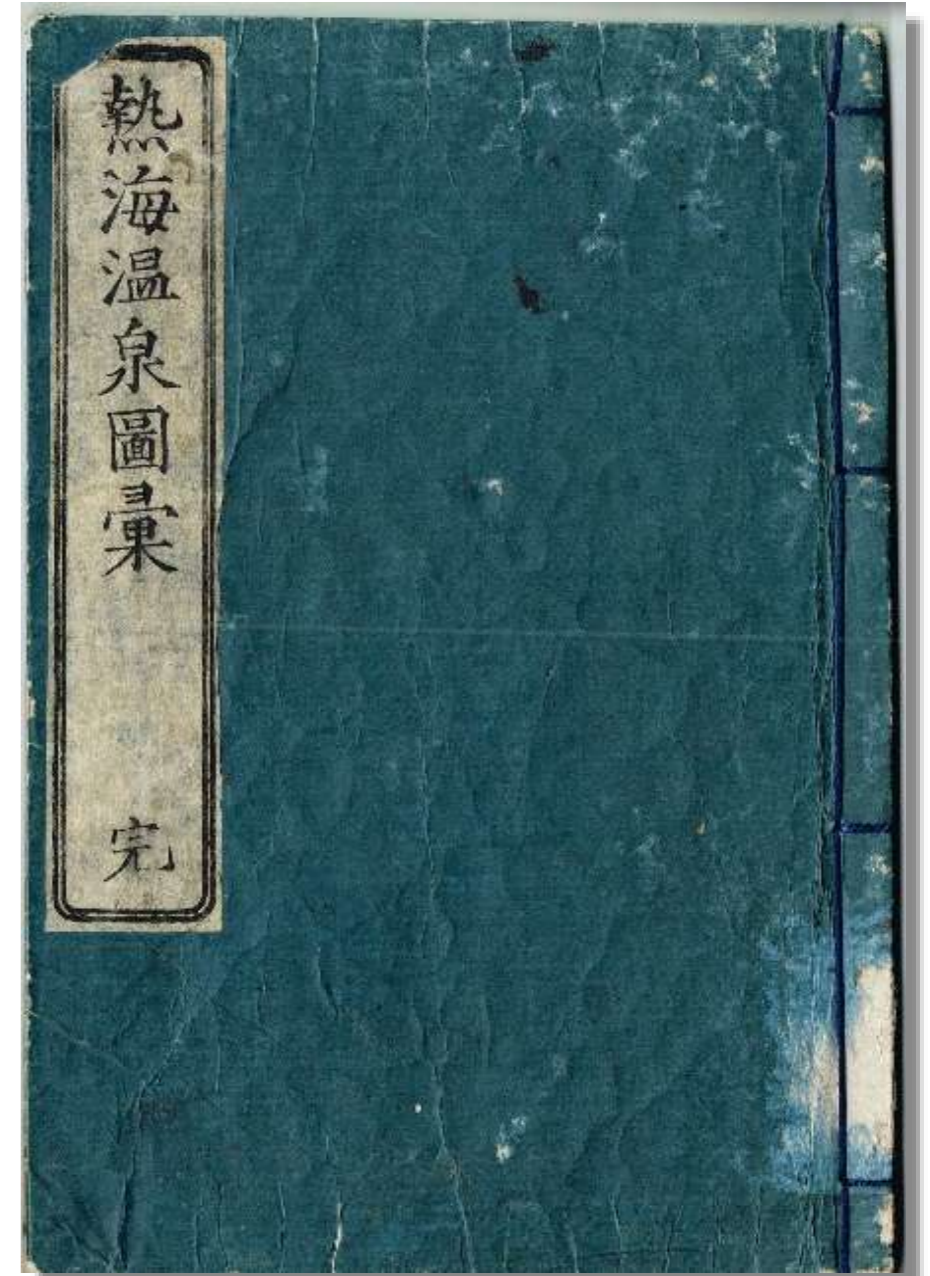
また湯前神社については湯前神社奉賛会から「湯前神社の歴史と伝承」著されております。



今井半太夫名主代々手控え抜書



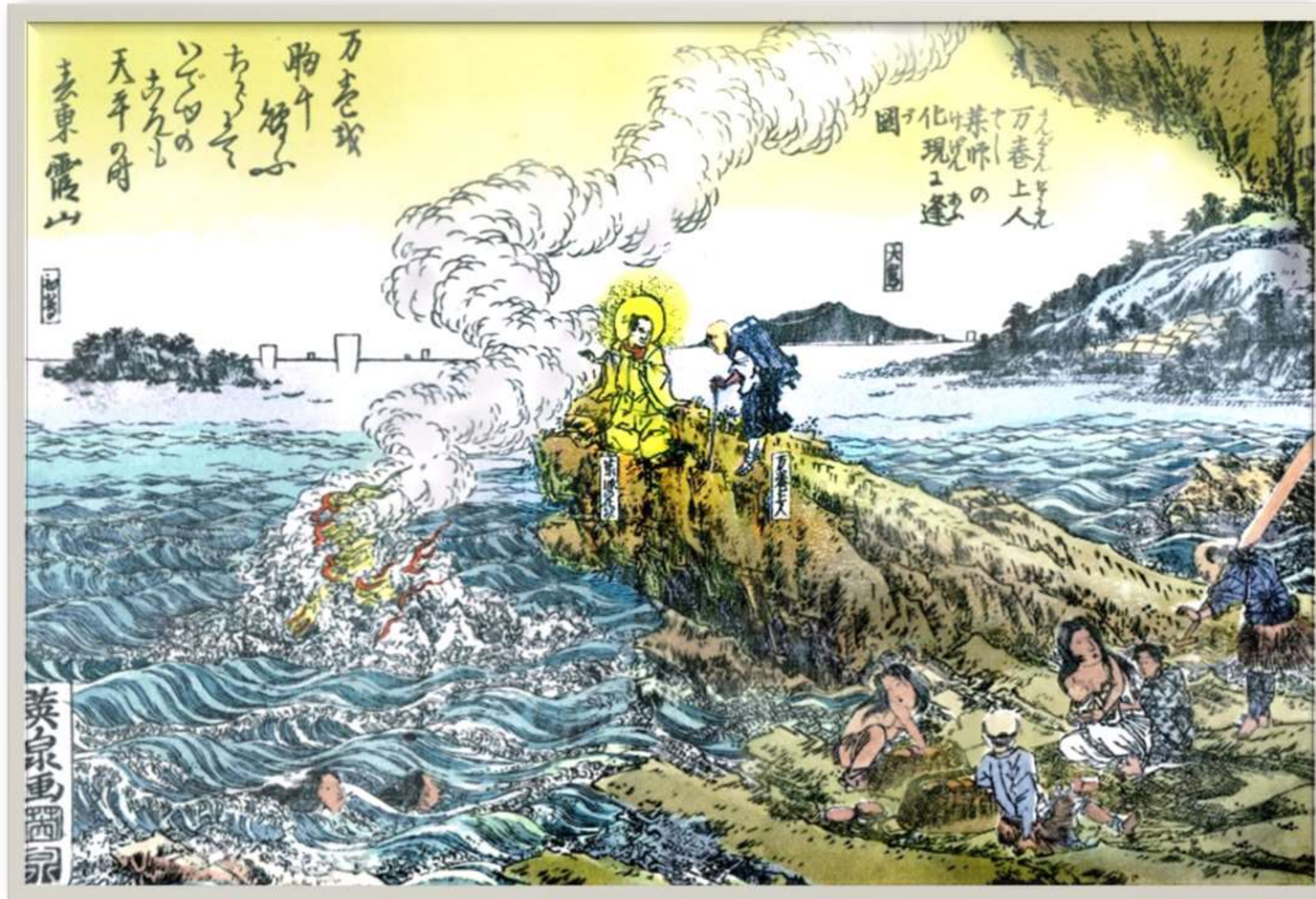
「熱海温泉図彙」は図入りで多くが記されている



山東庵京山による「熱海温泉図彙」 (熱海図書館蔵)

「わが国では温泉に浴して病を療治する事は
少彦名命を以て始めとする」

熱海温泉図彙での熱海温泉来由 薬師如来と万巻上人逢図



(熱海温泉来由図に着色)

少彦名命 (すくなひこなのみこと)

少彦名神は、玉造温泉、道後温泉、箱根の元湯温泉の発見者。温泉の神として、全国に祀られている小さく、腕白な神さまです。しかし行う事は大きくて多彩、大国主神と一緒に国作りをしたことから多くの神格をもちました。

小の象徴



商売
交易
酒
物神



国造り

薬



協働

医療
漁業
縁結び
安産・育児
農耕神

健康 温泉



ヒポクラテス



熱海の原点・湯前神社・少彦名命 ・多様な神格・キャラクター

少彦名命



蔵本三谷の少彦名命（佐古 権宮神社）

『古事記』によると、少彦名命とは海の彼方から「かがみ（ガガイモ）」の実を乗り、「ひむし」の羽で内張りした小さな舟に乗って、大国主命がいた出雲の岬にやって来た神様。独りでどう国造りをすればよいか案じあぐねていた大国主命を助け、協力して国造りを行った。そして、国造りが終わったのを見届けると、また海の彼方へ去って行ったとされる。また、

「日本書紀」には、「人己貴命・大国主命は少彦名命と力を合わせ、心を一にして、この世の人民と家畜のためにその病を治療する方法を定め、鳥獣・昆虫の災いを除くための『まじない』の方法を定めた」と記され、少彦名命の姿の小さなことは、「淡島に行って栗の茎によじ登ったら、はじかれて常世の国に行ってしまうわれた」ほどであったとされている。

これらの事から、医療の神、ひいては温泉の神、厄除けの神、あるいは百薬の長といわれる酒の神とあがめられるようになった。

少彦名命 一寸法師の原型



小さなガガイモの実の舟に乗り、蛾（ひいる・が）の皮の服を着て常世の国からやってきたユニークな神。この事から、お椀の舟に乗って川を下る一寸法師の話を生み出されたといわれています。

少彦名命は「小」の象徴！

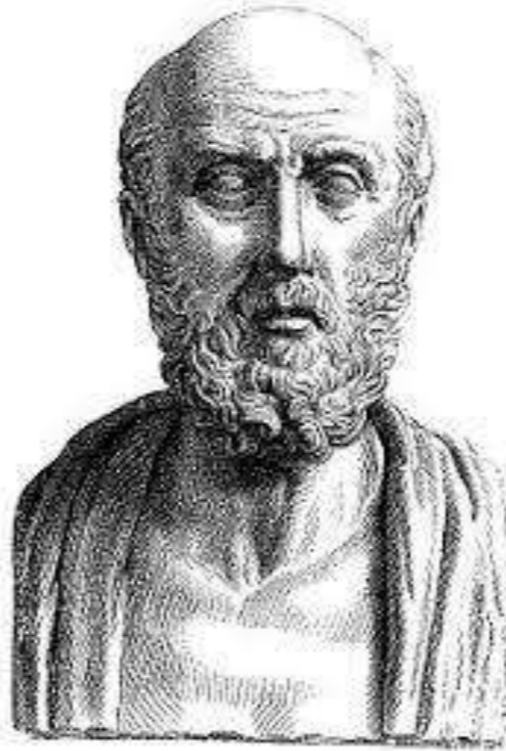
で、一寸法師をはじめとし全国に様々な姿で点在し、親しまれています。

一寸法師の別名例

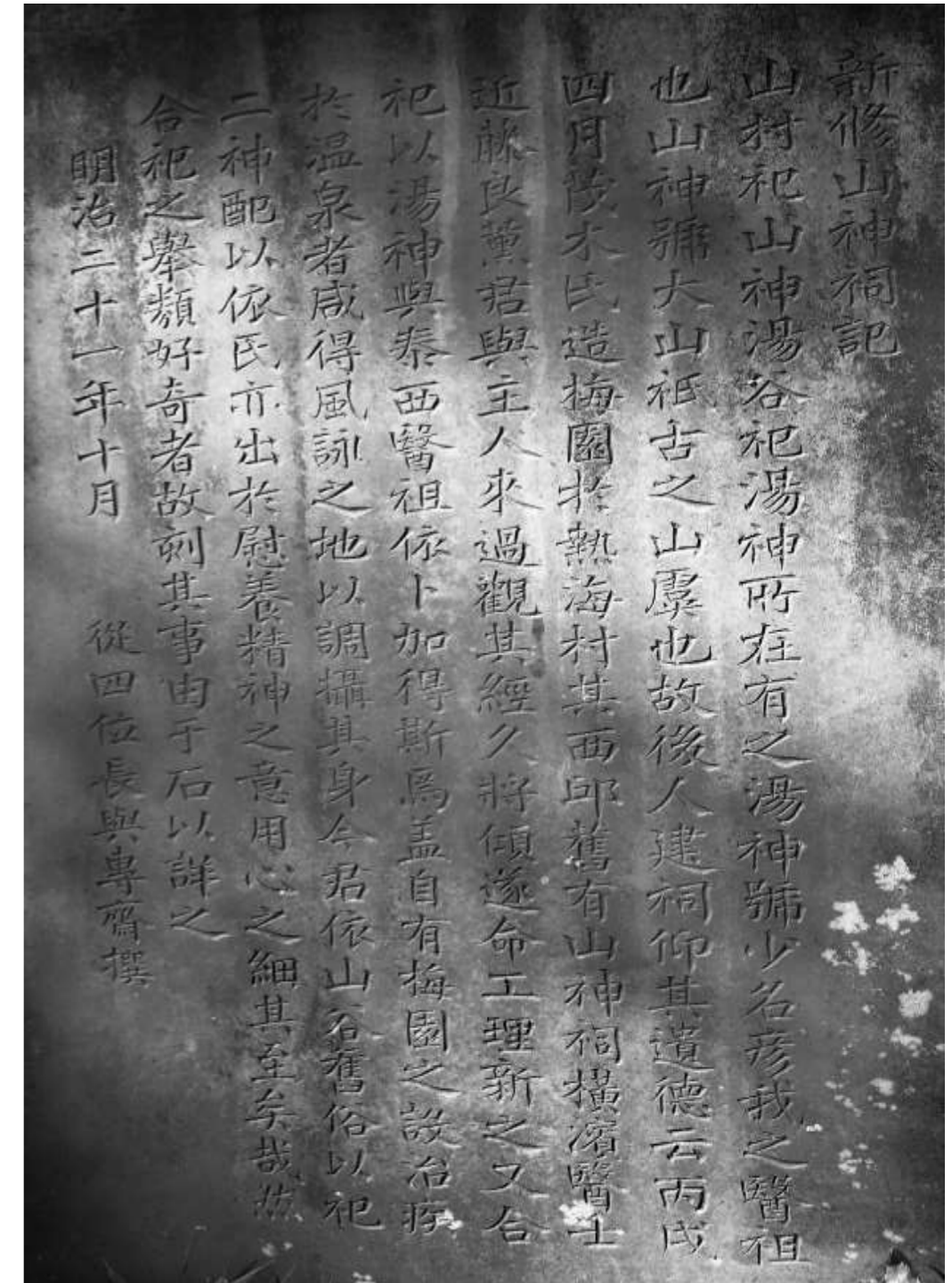
すねこたんぱこ、あくど太郎（あくとは踵）、豆助（親指）、指太郎（生まれた場所を表す名）、豆一、五分太郎（次郎）（小さいことを表す名）、三文丈、一寸小太郎、タニシ、カタツムリ、かえる、アイヌのコロポックルカムイ、キジムナー、ケンムンなど。

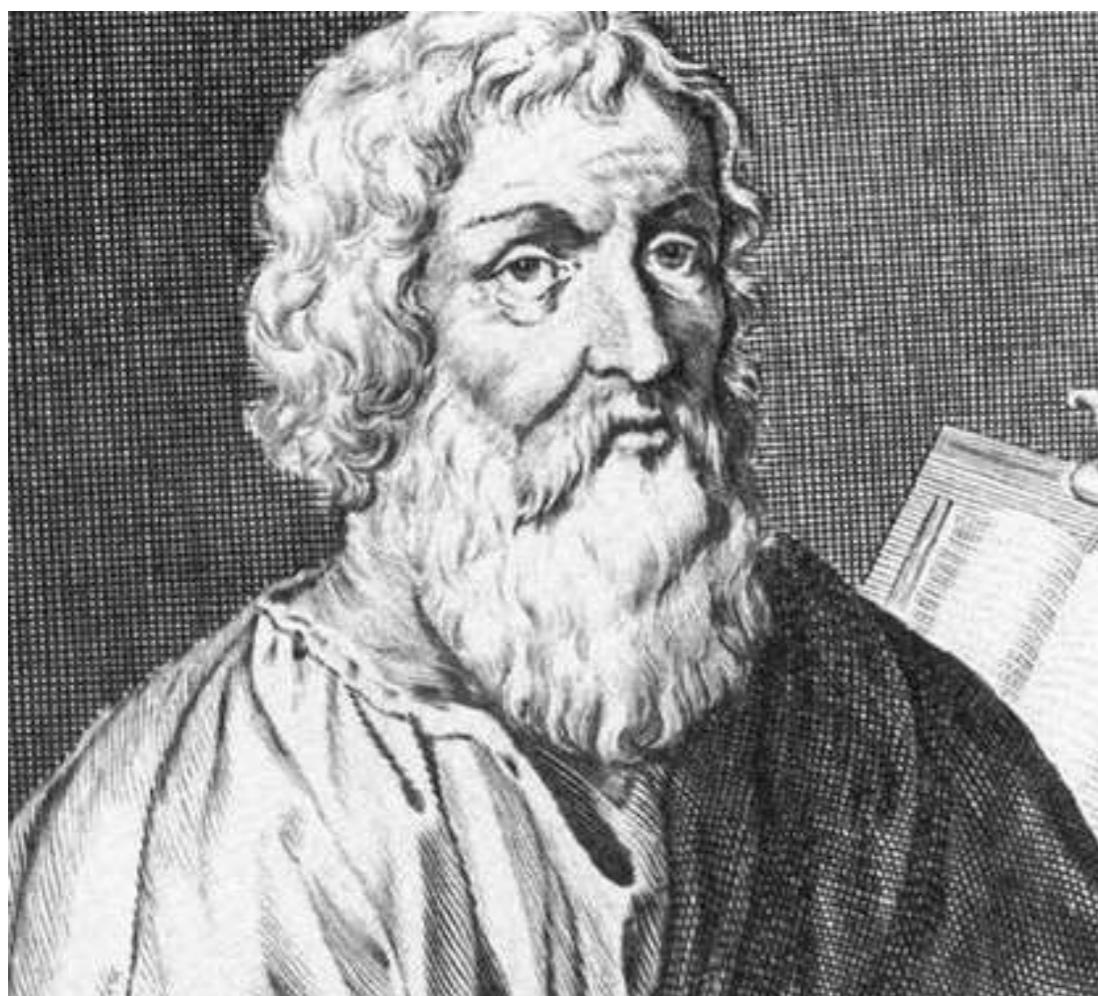


少彦名命とヒポクラテス



…丙戌（明治19年）4月、茂木氏が梅園を熱海村に造るや、その西邸に古い山の神の祠があった。横浜の医士近藤良薫君、茂木氏と来過、その祠の年を経ること久しく、将に倒れようとするを視て、遂に工理（たくみ）に命じて之も新しくした。また、合祀するに。湯の神と泰西（たいせい）の医祖・依ト加得斯（ヒポクラテス）を以てした。蓋（けだ）し、梅園の設備あり、以て身を調攝する。…（碑より抜粋）



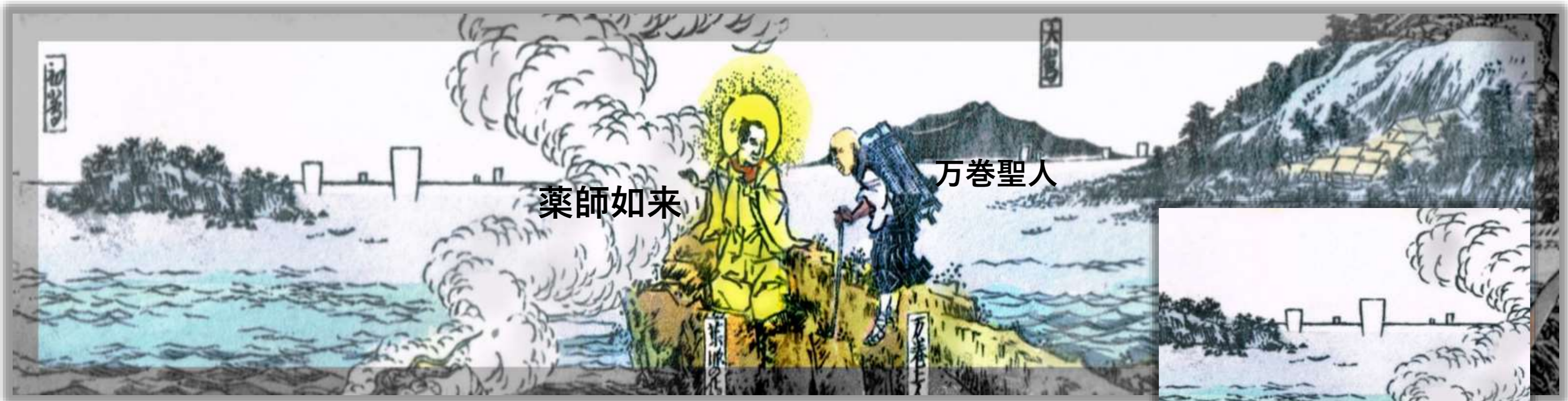


A.C460年頃 古代ギリシャの医師。
医学の父、医聖、疫学の祖

温泉の神・少彦名命と医学の祖・ヒポクラテスとの合祀の証は、熱海温泉の発展において大切な力です。

温泉の効果を利用したクアハウス（温泉療養館）が日本にも広まりました。ですが熱海には百年前に噲瀆館が完成し、間欠泉の大湯の蒸気を館内に導いて吸わせ、胸部の疾患を治療していました。

万巻聖人薬師之化現と逢凶



奈良の時代、熱海の海中は沸く熱湯によって魚類が死んで、甚大な被害を被っていました。それにより困っていた漁民たちの訴えを聞き、箱根の万巻（まんがん）上人は、祈願によって泉脈を海中から山里へ移しました。里人は大湯と名付け、湯前神社を建立し少彦名命を祀りました。



万巻聖人

『箱根山縁起』によれば、万巻にも及ぶ
 経典を読んだので万巻（萬巻）と称され、
 日本全国の霊場を巡行しました。

また箱根三所権現（法躰・俗躰・女
 躰）を感得。箱根神社を建立し、芦ノ湖
 に住む9つの頭を持つ毒龍（九頭龍）を
 法力で調伏。九頭龍神社を建立しました。



薬師如来

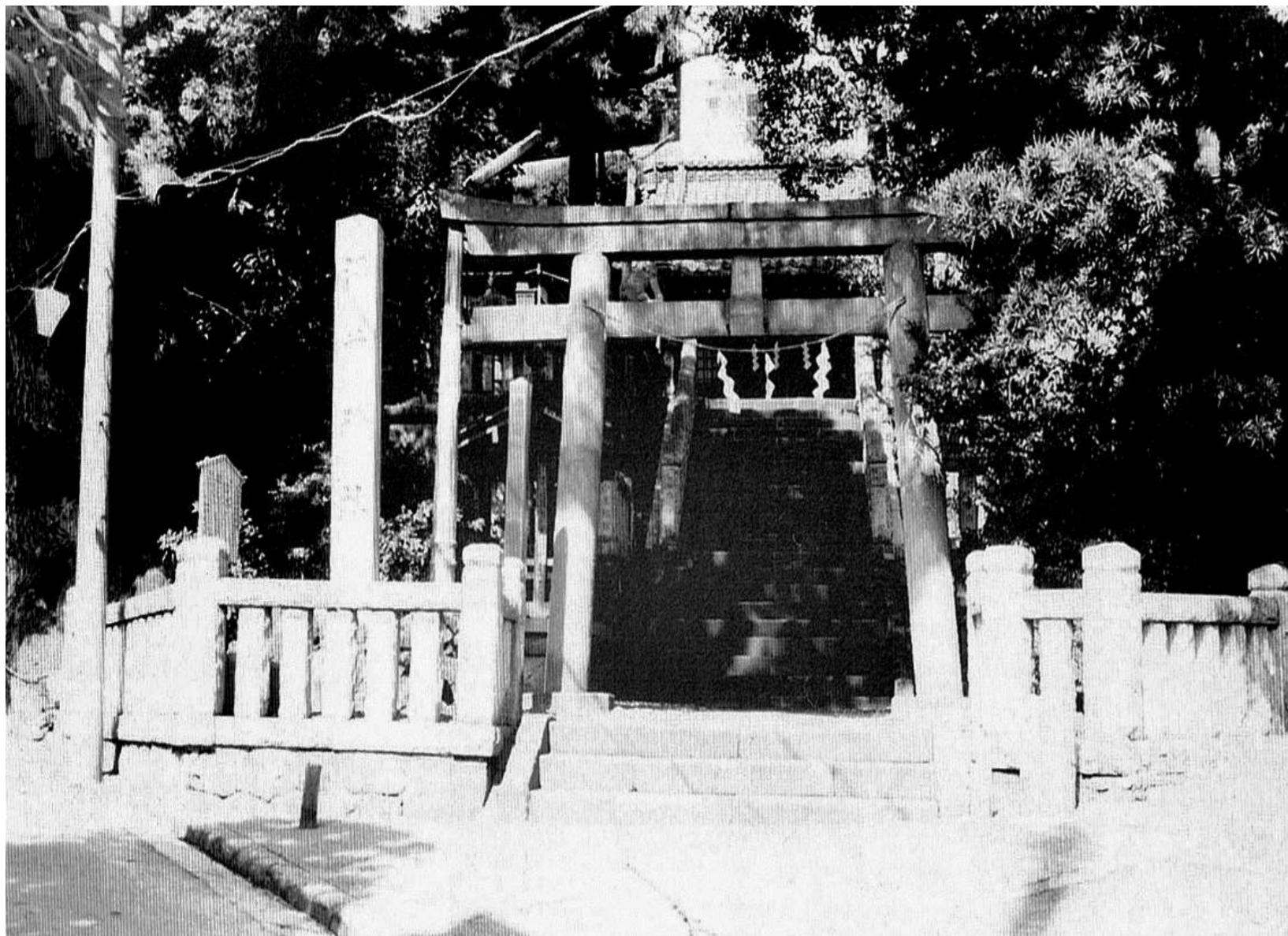
薬師如来は、人々の現実的な願い事を叶えてくれる、人間に親しみ近いところの仏様で、人々を救いたいという現世での利益を表した姿です。

如来は、仏様になる前の修行の身、12の誓願をたてていますが、その一つにどんな病気も治すというのがあります。また、衣食を満たす、悩みを解決する、地獄へ落ちないように導いてくれるというのがあります。現世的な願いをかなえ、病氣平癒（へいゆ）の功德で信仰されています。

本地垂迹思想では薬師如来は、少彦名命の仏の姿である。



湯前権現（現・湯前神社）

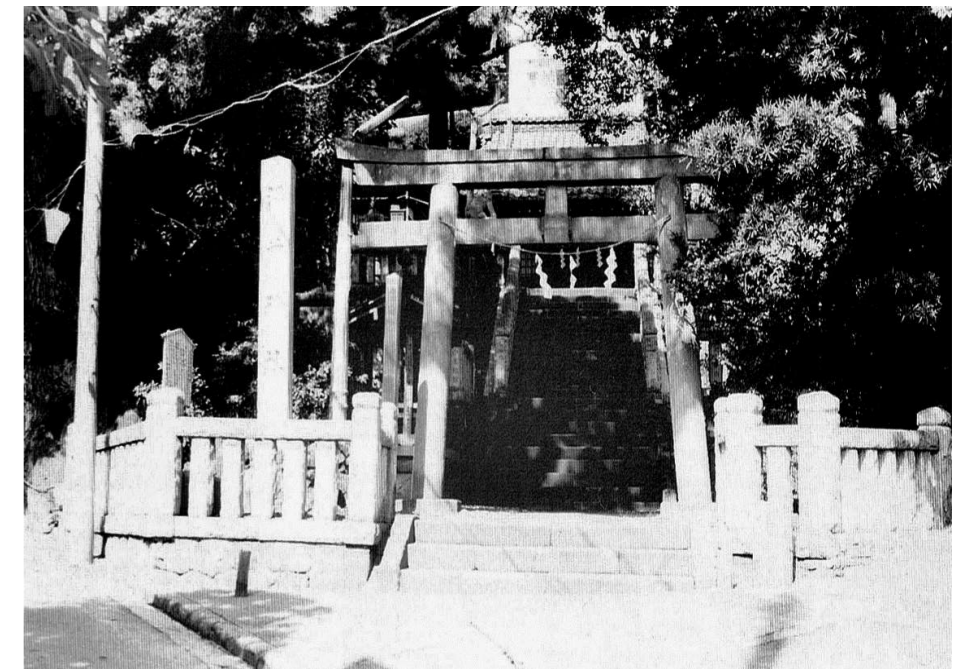


神様から湧出した温泉は「病を除く効果がある温泉がある」とのお告げを受け、「この前にお社を建てて拝めば、現世も病を治す、来世も幸せに暮らせる」と万巻上人は人々に説いたと伝承されています。これが大湯の前に少彦名命を祀り建立された湯前神社です。

大湯・少彦名命・湯前神社



大湯の間欠泉を使い、少彦名命を祀った湯前神社



大湯間歇泉

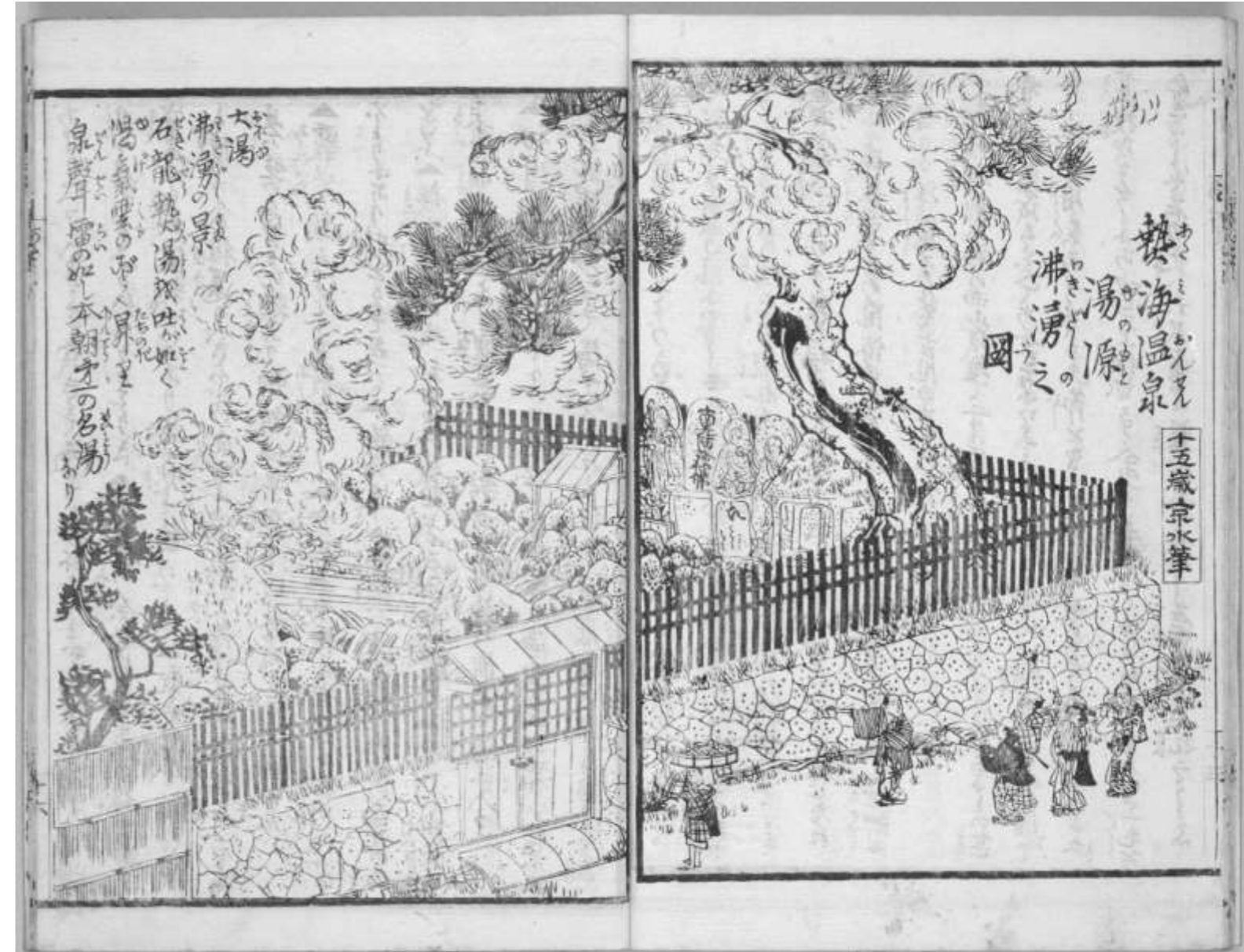


かつての「大湯間歇泉」は、自噴泉で昼夜6回あり、湯と蒸気を交互に激しい勢いで吹き出し、地面が揺れるようであったといわれています。

明治中頃から次第に減少し1923年（大正12年）に停止しました。

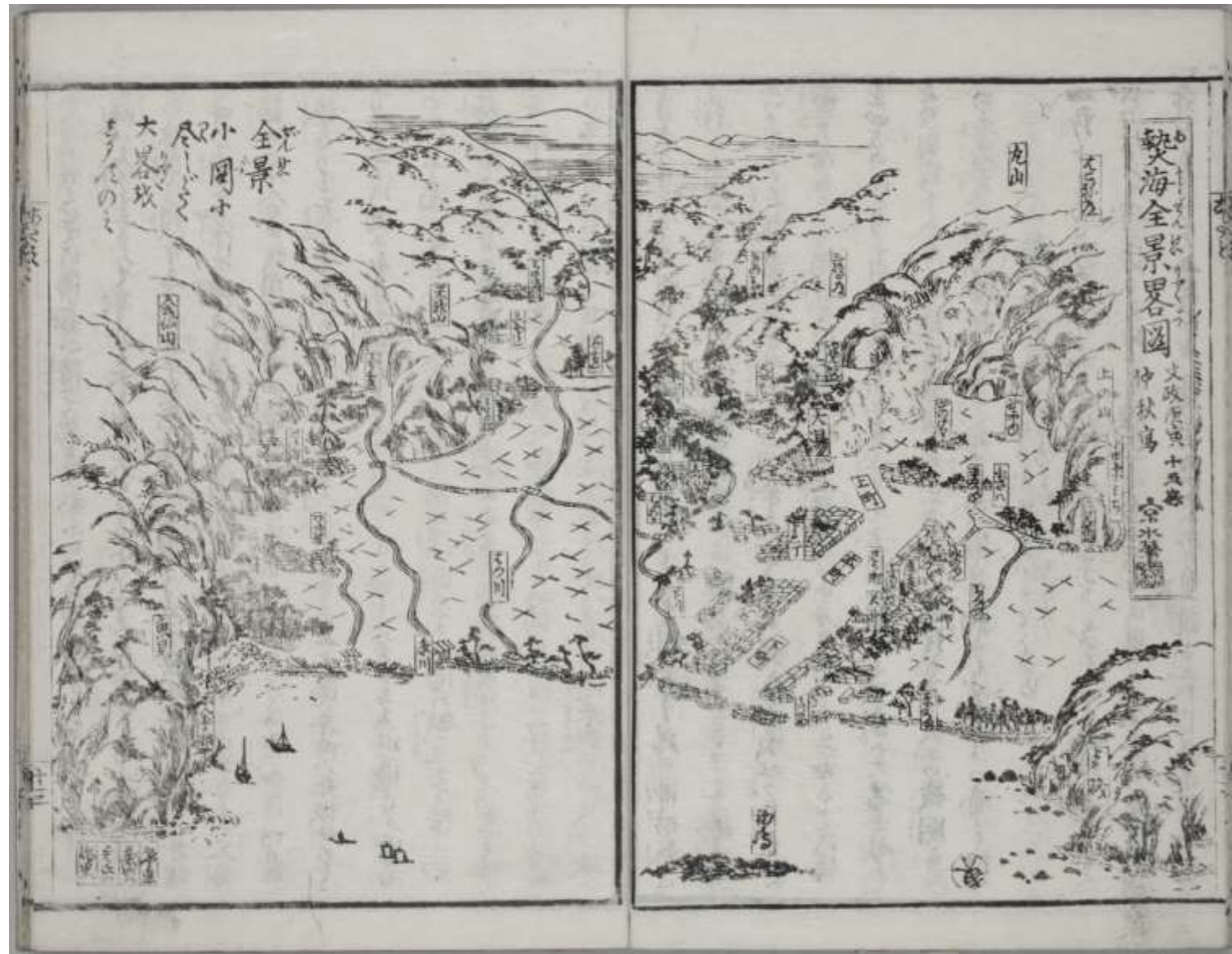
熱海温泉図彙 - 挿絵

熱海温泉図彙 - 当時大湯



熱海温泉図彙 - 挿絵

熱海温泉図彙 - 当時地図と湯殿の様子





湯前神社



神部千三さん

明治35年2月3日 大乘寺本堂より出火。強い西風により湯前神社に延焼し上の山へ飛び火した。しばらく再建されなかったが、8年後明治44年、神部千三氏の呼びかけに応じた人々の資金提供により宮大工・香川常五郎（請負額千円）にて建築、再建されました。

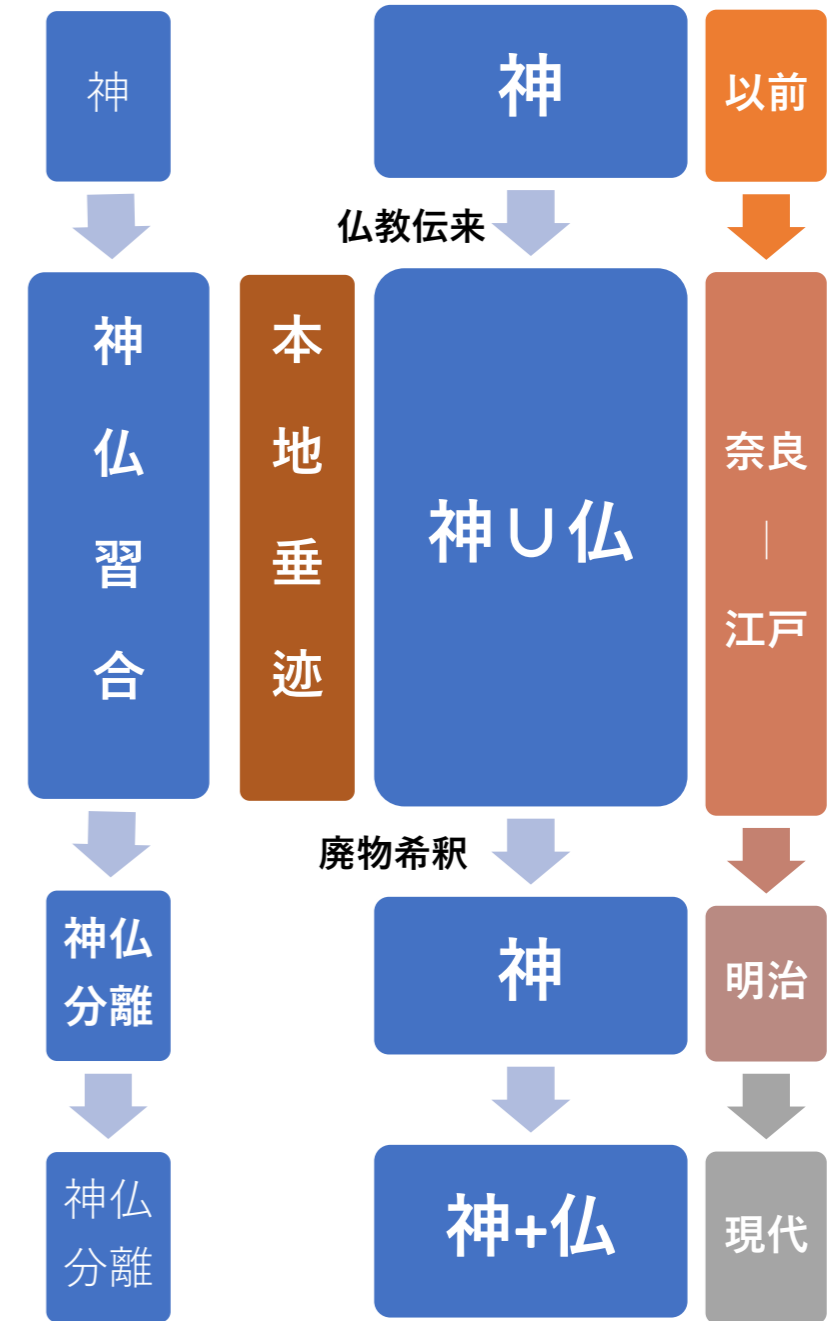
神と仏の文化

日本が生んだ「神」（神道）に対し「仏」（仏教）が奈良の時代中国より伝来されました。神・仏というこの異なった思想を対立させず融合させたのが

「**本地垂迹**・ほんちすいじゃく」という考え方です。姿を持たない「神」（自然）が「仏」（仏像）の姿となって世に現れる（**権化**・**権現**）という思想。少彦名命が薬師如来といった具合です。

これを「**神仏習合**」とよびました。奈良から江戸まで変化を遂げながら「神宮寺」として存在してきました。

しかし、明治になり日本古来の「神」＝天皇ということから、再び神と仏を分けるという「**神仏分離**」行われました。このとき多くの神社、仏像が破壊されました。このことを「**廃仏毀釈**・はいぶつきしゃく」といいます。



「豆州熱海湯治道知邊」 1 翁との出会い

「豆州熱海湯治道知邊」にも熱海温泉図彙とほぼ同様な内容の伝承が書かれている



「豆州熱海湯治道知邊」

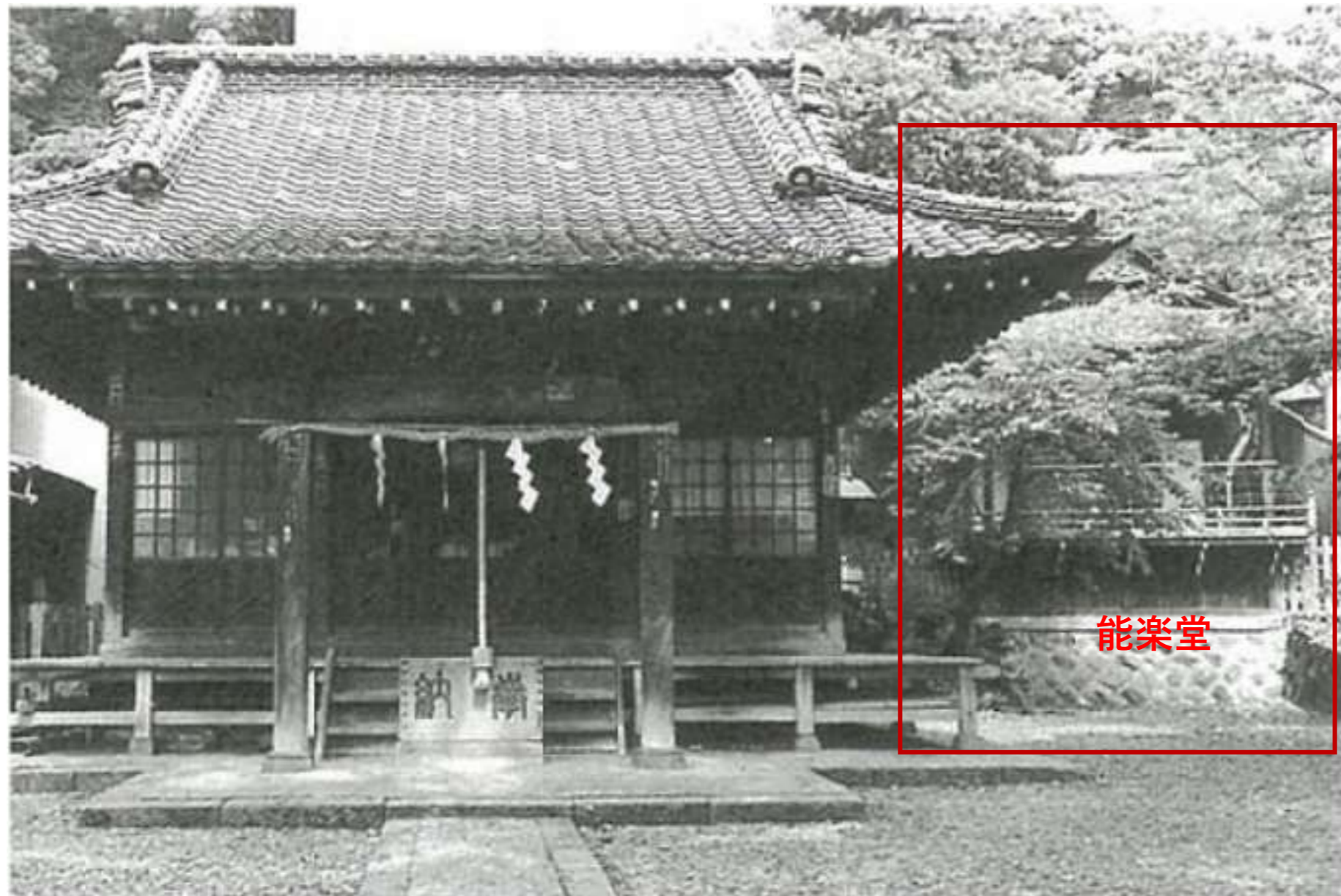
箱根権現に徳の高い僧「万巻上人」が熱海の海を見渡すと、波の内より煙が立ち昇り火焰が吹きだして魚類は焼け死に焦熱地獄の様相を呈していた。これを見て哀しまれ、お経を読み念仏を唱えていたとき、どこからか白髪の翁がやって来て「見られるように、此の海中に温泉があって熱湯を噴出し魚類を焼き殺している事を常に哀れに思っていた。そればかりではなく人の万病を治す不思議な霊湯を海中に置いておくのは玉を淵に沈めておくに等しい。どうか仏法の功德を持って上人がこれを祈りこの霊湯を山里に移し給えば魚類は死をまぬがれ人民は病を助かる事その功德は幾万年にも伝えられるであろう」と言い終わるとその姿は見えなくなった。



「豆州熱海湯治道知邊」

これは只人ではない。薬師如来のお告げであろうと海岸の洞に入り、断食して祈る事三七日（二十一日）、満願の夜後ろの山々が鳴動し海上の波が逆巻いてその音は百千の雷のようであった。熱海の里人はこれを「大湯」とよんでいるのはこれである。その温泉から湯前神社がつくられ少彦名命を祀られました。

能楽堂



能楽堂の扁額

現在の神輿会館の以前には、能楽堂が建っており戦前は、芝居、能が演じられた。大正、明治、それ以前は保養に訪れた名士、さらに前は武家の方々が能楽堂を使って演芸が行われ、住民も見物したと伝えられる。最近まであった能席堂は、土地の名士達によって明治44年に再建のものと推定される。

湯前神社内部（現在）

現在の湯前神社内部 神棚を挟んで沢田政広作の「隋身像」がおかれている



隋身像

湯前神社拝殿内には、左右に彩色された大きな人物の坐像が鎮座している。ガラスケースの中に入っている像は、
 沢田政広作の「隋身像」

右大臣と左大臣の二体はいずれも108cmの大きさと、1926（大正15）年に製作、沢田32歳の時の作品である。



隋身像



湯前神社の石碑

湯前神社は上町より一丁余り西にあり、まつられているのは少彦名命で、初川の傍らに石碑が立っている。

1770（明和7）年に社人が建てたもので、
文は信陽の源迦魏（げんつうぎ）
書は東江源鱗（こうとうげんりん）

千百余字を連ねて熱海温泉の生い立ちを記している。



石鳥居（石華表）



久留米藩主 有馬公奉納

久留米藩主有馬公は、父子二代
（六代藩主 則維・のりふさ公、
七代藩主 頼僮・よりゆき公）に
わたって熱海の温泉を愛好された。

石燈籠



久留米藩主 有馬公奉納

有馬頼僮公は関流算学の大家で、その功績が評価を受け、明治44年明治政府より従一位を追贈されている。



湯前神社の額と湯口



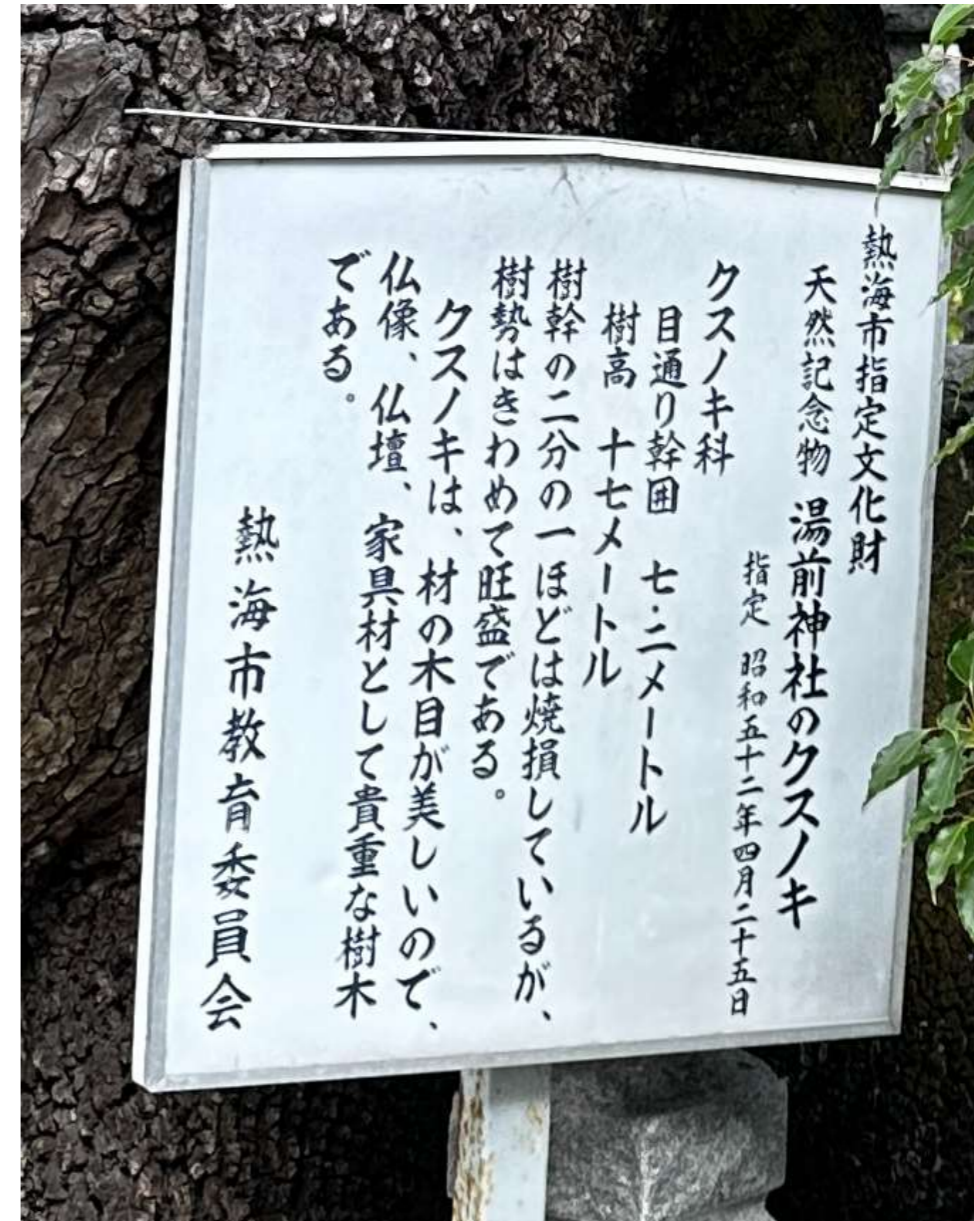
湯前神社由来記

祭神 少彦名神
 例祭 2月10日、10月10日
 由緒 平安朝より明治に至るまで・・・
 特殊神事 献湯祭 湯汲み道中



湯前神社クスノキ

熱海市指定文化財 湯前神社クスノキ



湯前神社取調書

湯前神社取調書

話は変わります。今井半太夫の「名主代々手控」に嘉永二年（一八四九）の「湯前神社取調書」が載っていました。

『湯前神社取調書』

伊豆國加茂郡葛見庄熱海村

一、温泉守護神 湯前大権現社

一、社地 長サ二十五間 横十二間

見捨地御座候

一、祭神 少彦名命 一座

一、神躰 木像にて座像、丈二尺二寸

但し作者不明

一、鎮座勧請は天立三空の頃と曰し伝えられるだけで口書等一切あらず

一、祭礼の日は九月十日、年に一度で儀式等一切無く、お酒、供餅のみ

（棟札の写し）

一、造立せしもの 熱海郷湯瓦村 湯宮

大旦那欄宜 四郎太夫家吉

大工 系右衛門

一、石華表 高さ一丈五尺太さ一尺五寸

横一丈 有馬玄蕃守様御寄付

享保四亥年

一、石燈籠 高さ 七尺五寸

宝曆八寅年

一、額 湯前神社 南楼閣其寧書

安永九子年

一、社奥殿 間口六尺 奥行六尺

社壇 高さ三尺 横六尺

一、幣殿 二間四方

一、拜殿 表間口四間 奥行二間半

一、未社 古木楠一本 廻り二丈四尺三寸

此外柴、細木、檜之六是有り候

一、石段 上段 正面八間 高さ八尺

下段 正面八間 高さ六尺

嘉永二年酉年四月十五日

京都吉田殿配下

彌宜 石渡左渡

右の通取調へ相違御座無く候

湯前神社の再興の功労者 神部千三氏 孫・神部俊男氏

神社境内左手に「金千円也、神鈴千三」の石碑は、明治三十五年の火災で湯前神社社殿が焼失した際、再興の資金（自ら金千円を拠出し、更に湯治仲同等に呼びかけて二千元余）を提供頂いた神部千三氏の記念碑です。



神部千三さん



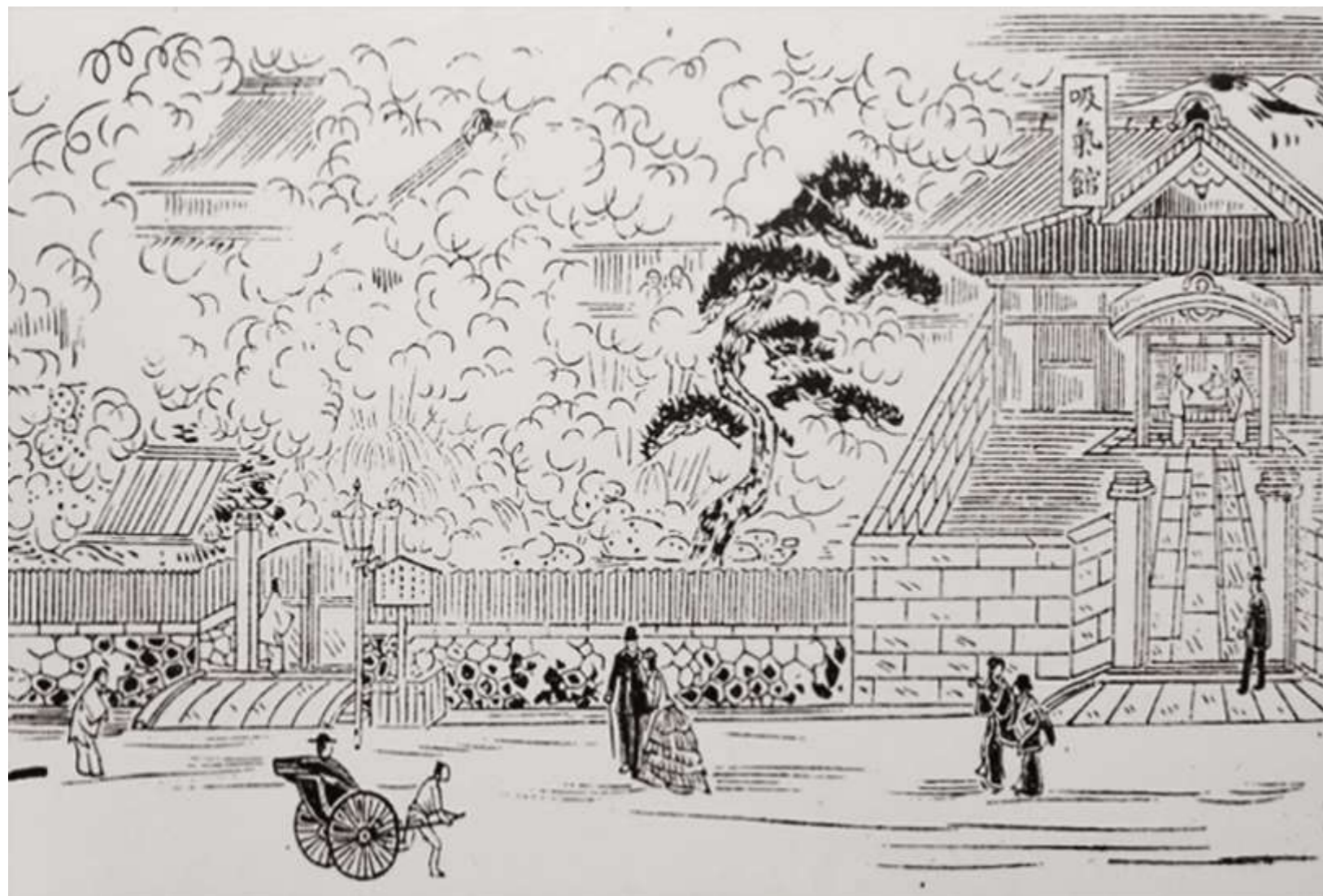
神部俊男さん夫妻



噴汽館（昭和2年12月撮影：今井写真館提供）

少彦名命は 温泉療法の神
そんなことからか 熱海には
「噴汽館」が造られました。
この建設地を遣欧したのが今
井半太夫。祖先伝来の地であ
るとともに「元湯」とよばれ
ている地、最上無比の地でし
た。

今井半太夫



噓氣館

今井半太夫

「名主代々手控え」を残した今井半太夫は、多くの貴重な史料を残し、熱海村の災害の際には私財をなげうち、産業の育成にあたっては良き指導者として数々の貢献を果たした「熱海の恩人」とも言うべき存在です。今井半太夫は個人名ではなく襲名。

明治の初め宮内庁より「噓氣館」建設にあたり、先祖伝来の土地、元湯の最上無比の地を提供。運営の責任者になるも様々な理由で立ち行かず、その後歴史に名を出すことがないままとなっている。

件納地敷館瀾噲

「瀾噲館敷地納の件」

静岡県伊豆国加茂郡熱海村

持主 今井半太夫

場所 加茂郡熱海村字本町四四五番乙号の内

一、宅地 四畝二十七歩

熱海村の中には温泉宅地も夥しくありますが右に書いた私の所有地は祖先伝来の地で子孫代々居住してきた所でございます。それに加えて源泉の地であるため従来「元湯」という名で呼ばれて参りました。恐れながら申しますと最上にして無比の地でございます。

しかしながら、今回宮内省におかれましては、厚い思い召しをもちまして、普く天下の公衆の患者の疾痼を癒そうとして蒸気浴室をご建設になり、温泉改良のご趣旨によって上記の土地を求めておられると仄聞いたしておりました。私どものような者といたしましては感激の極みでございます。

つきましては、祖先以来、大御代のご恩沢に浴し、無事に生活してこられたことを有難いことと考え万分の一でも国の御恩に報じたいと思ひまして、右の宅地四畝二十七歩を献納させていただきます。尤も献納の土地にある温泉につきましては、従来どおり使わせていただけますようお願い申し上げます。

右縮図を添えて御願ひ申し上げます。お聞き届けいただければ家の面目これに過ぎず、ありがたき仕合わせに存じます。どうぞこのことを御奏上いただけますよう謹んで御願ひ申し上げます。

明治十六年八月

右 今井半太夫

右同人男 今井俊太郎

静岡県令大迫貞清殿



当初、噺汽館の利用は無料でしたが1890年代に払い下げられて以降は費用を徴収するようになりました。加えて、『熱海に浴する人は健康と病体とを問わず必ず浴医局にたより診察を受けるをよしとす』 是れ来浴前と来浴後と体重其他一般の景況を比較し、以て入浴の効能を明かにする」と記載されるように、温泉を利用した西洋の温泉地型の新しい滞在入浴法の在り方が提唱されています。1890年代の熱海温泉の利用者は、噺汽館の利用を必須にするなど、温泉療養地としての志向を強くしていました。

御汲湯御用



家康は熱海の温泉と効能を気に入り、病気がちだった吉川廣家に熱海の温泉五桶を送り届けさせた。

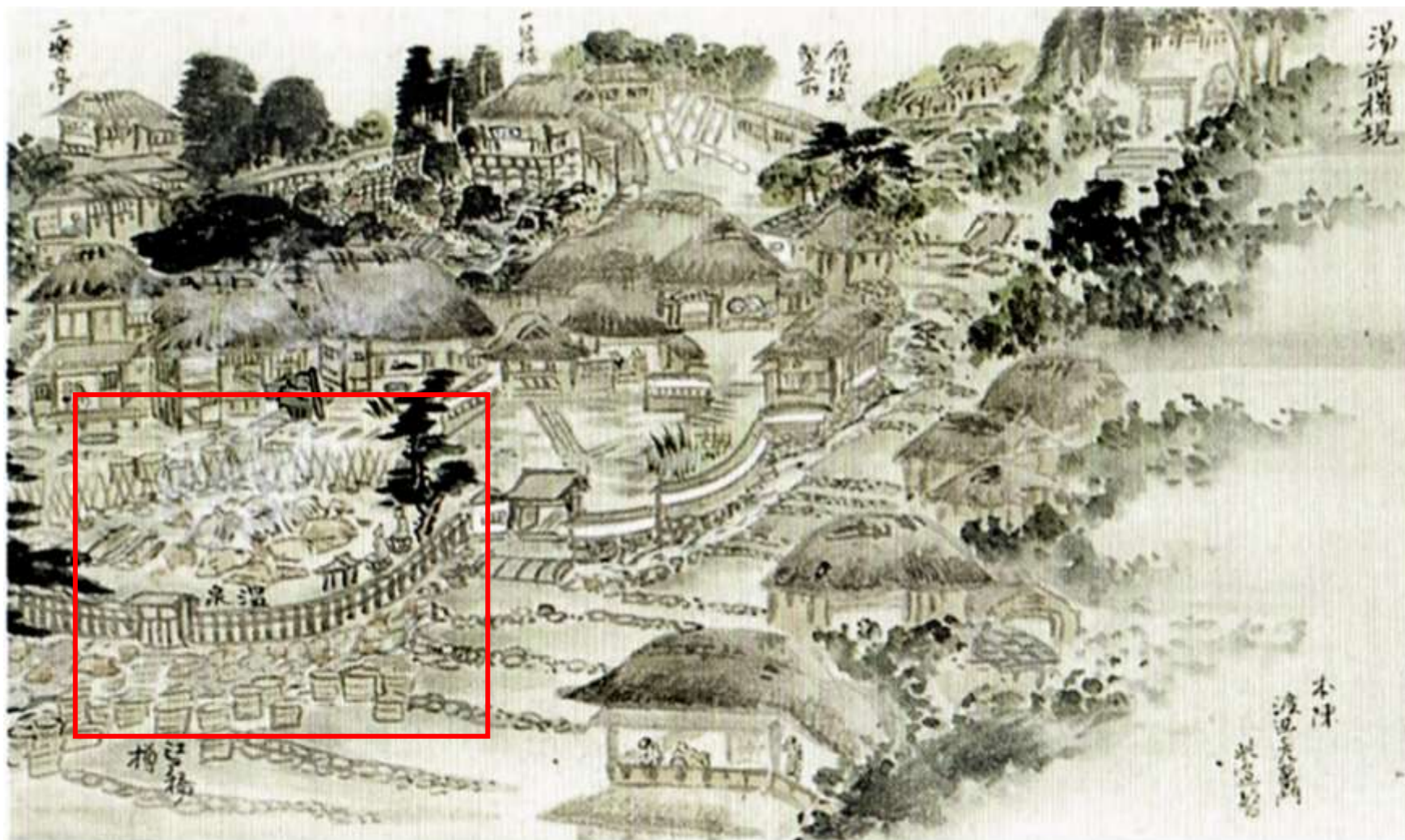
以後三代将軍徳川家光、四代将軍家綱と長きに続く。その際には江戸から御汲湯奉行が派遣され、厳重な監督のもとで熱梅の湯が汲み出された。

御汲湯が行われたのは大湯で、『御用は「湯戸」の主人に限られ、7つの作法に従い厳格に行われていた。



享保の頃、徳川吉宗公の御代に御汲湯上納が盛んに行われました。はじめは陸地でしたが次第に船で送られました。享保19年の間の9年間での合計は、御湯3643樽。天明4年度の御汲湯御用は、天明4年より天明5年の間8回、229樽でした。

大湯の御汲湯



江戸へ運ばれる湯樽が積み上げられた今井本陣
『熱海道之記』醉月亭月斎作 部分
〈武田科学振興財団 杏雨書屋 蔵〉

図は江戸へ運ばれる湯樽が積み上げられた今井本陣の画。

献湯祭 温泉に感謝・繁栄を願う春・秋の例大祭

昭和39年、新幹線開通を記念して熱海温泉組合は「湯汲道中」のイベントを開催しました。それを引き継ぎ、現在、毎年春と秋の例大祭で温泉に感謝し、熱海温泉がますます繁栄することを祈願し、江戸城での故事を再現した『湯汲み道中パレード』、連合神輿渡御などが古式ゆかしく行われます。



ご清聴ありがとうございました。

タウト塾@熱海

2022

ゆぜんじんじゃ

令和4年度

熱海温泉と 湯前神社

06



- 熱海の温泉
- 熱海温泉図彙
- 少彦名命
- 大湯間欠泉
- 化現の逢凶
- 湯前神社
- 噺氣館
- 今井半太夫